

オカメザサ炭疽病（新病害）の発生

竹内 純・榮森弘己*

（環境部・*病害虫防除所）

【目 的】

グラウンドカバープランツの主要品目であるオカメザサ *Shibataea kumasaca* (Zollinger) Makino のポット栽培株が枯死する病害が多発した。そこで、本病害の原因を究明し、防除対策の基礎資料とする。

【試験方法】

1) 発生状況調査、病原体の検出、病徴の再現試験。2) 病原体の同定。

【成果の概要】

1) 2002年7月、露地のポット栽培で発生した。はじめ葉身に褐色の小病斑を生じ、葉脈に沿って拡大し、周囲明瞭な灰褐色～灰白色の大型、不整形の病斑となった。病斑周辺部は退緑し、やがて葉全体が灰白色となり、葉枯れを起こし、落葉した。多数の葉が発病すると株全体が枯死した。発生圃場では多数の株が集約的に管理されていたため、激しく発病し、枯死株や出荷不能株が多発した。病斑上には微小な暗褐色～黒色の小粒（分生子層）を散生した。本症状は植栽地および母樹圃場でも認められるが、日当たりや通風が不良な部位の草丈の低い株に限られた。罹病部からは菌叢性状が同様な糸状菌が高率に分離された。分離源宿主へ接種すると、自然病徴が再現し、接種菌が再分離された。またイネ科5種を含む5科10種植物に接種した結果、オカメザサのみに病原性を示した（表1）。

2) 病原菌は病斑上に顕著な剛毛を多数有する半球形の分生子層を散生した。分生子層上の剛毛は、暗褐色～黒色で、長さ100～153 μm であった（表2）。PCA培地上での分生子は、フィアロ型に形成され、無色、単胞、長楕円形で、大きさ11.0～23.8 $\times$ 3.7～6.1 μm であった（表2）。PCA培地上での菌糸から形成された付着器は、淡褐色～褐色、円形、楕円形あるいは棍棒形で、切れ込みが少なく、大きさ8.5～17.7 $\times$ 5.5～10.4 μm であった。また菌叢の生育は10～35℃で認められ、適温は30℃付近であった（図1）。本菌の形態的特徴は *Colletotrichum* 属に属すると判断された。しかし、Sutton (1980) の検索表で該当種がないこと、また rDNA の ITS 領域における相同性検索では *Colletotrichum* 属には絞られるものの既報種との homology は低かった。本菌はオカメザサに特異的に病原性を示すが、*Shibataea* 属植物には *Colletotrichum* 属菌の記録がなく、未記載種の可能性があるため種名同定を保留し、病原菌を *Colletotrichum* sp. とするに留めた。オカメザサには本属菌による病害は未記録であり、病名として炭疽病（Anthracnose）を提案する予定である。

3) 発生圃場では長年、多数のオカメザサが栽培されており、病原菌の密度が増加していたことが考えられた。本病の防除対策として、落葉を含め、罹病株の処分を徹底するか、あるいは管理する場所を替え、過灌水をさけ通風を良好とすることが有効と考えられる。

表1 オカメザサ分離菌の病原性

接種植物名 (科名)	病原性 ^{a)}
オカメザサ (イネ科)	+
クマザサ (イネ科)	—
イヌビエ (イネ科)	—
エノコログサ (イネ科)	—
メヒシバ (イネ科)	—
コマツナ (アブラナ科)	—
イチゴ (バラ科)	—
アマクリナム (ヒガンバナ科)	—
ゼラニウム (フウロソウ科)	—
エビネラン (ラン科)	—



オカメザサ炭疽病の病徴

a) + : 病原性あり, — : 病原性なし

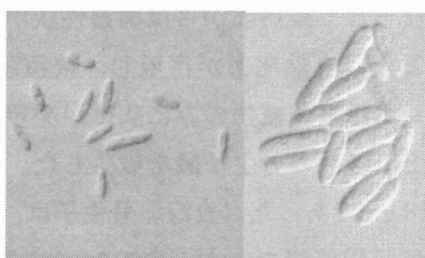
表2 オカメザサから分離された *Colletotrichum* 属菌の形態^{a)}

菌株 分離源宿主	分生子 の形態	分生子の大きさ μm (平均)	付着器の大きさ μm (平均)	剛毛 μm (平均)
ASh-020717-1	長楕円形	11.0~23.8×3.7~6.1 (15.0×4.3)	8.5~17.7×5.5~10.4 (12.6×7.8)	100~153 (120.3)
ASh-020717-2	長楕円形	11.5~22.9×3.8~5.7 (14.7×4.2)	9.0~17.5×5.5~10.0 (12.7×8.0)	107~149 (127.1)

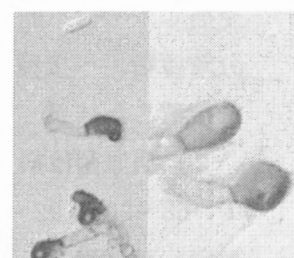
a) 分生子および付着器 : PCA 培地上の測定値, 剛毛 : 接種により形成した病斑上



オカメザサ炭疽病菌の分生子層



オカメザサ炭疽病菌の分生子



オカメザサ炭疽病菌の付着器

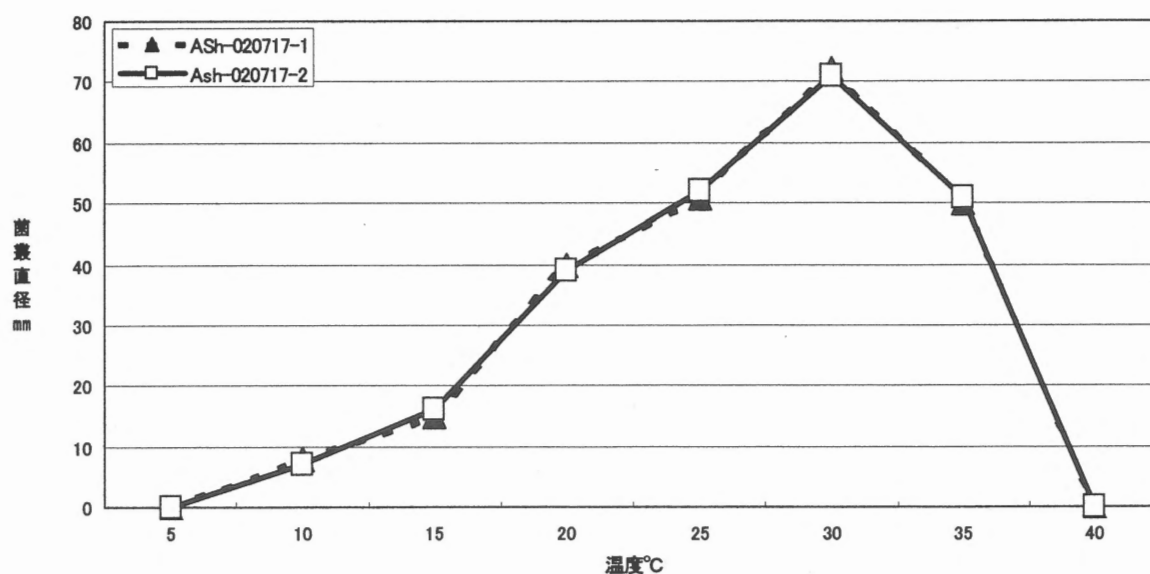


図1 オカメザサ分離菌の菌叢生育と温度との関係